

「愛媛大学学生として期待される能力～愛大学生コンピテンシー～」 について

理事・副学長（教育担当） 松本 長彦

〈目次〉

1. 「愛大学生コンピテンシー」の策定について
 2. 「愛大学生コンピテンシー」の構成要素について
 - I. 知識や技能を適切に運用する能力
 - II. 論理的に思考し判断する能力
 - III. 多様な人とコミュニケーションする能力
 - IV. 自立した個人として生きていく能力
 - V. 組織や社会の一員として生きていく能力
 3. おわりに
- 〈参考資料〉

愛媛大学学生として期待される能力～愛大学生コンピテンシー～

5つの能力	12の具体的な力
I. 知識や技能を適切に運用する能力	1. 必要な情報を収集・整理できる 2. 個別の知識や技能を相互に関連づけながら習得できる 3. 習得した知識や技能を基に自分の考えを組み立て、適切に表現（記述・口述）できる
II. 論理的に思考し判断する能力	4. 広い視野と論理的思考に基づき分析・解釈できる （例：クリティカル・シンキング／創造的思考） 5. 科学的根拠に基づき判断し、解決策を提示できる （例：意思決定・判断力／課題探求・発見・解決力）
III. 多様な人とコミュニケーションする能力	6. 様々な状況に応じて適切な対話・討論ができる （例：ダイアログ／ディスカッション／プレゼンテーション） 7. 目的達成のために多様な人と協働できる （例：協調性／チームワーク／リーダーシップ）
IV. 自立した個人として生きていく能力	8. 自らの個性や適性を活かして行動できる （例：自己理解／自己決断／リフレクション） 9. 社会的関係の中で自分の行動を調整できる （例：順応性／セルフマネジメント／規範遵守）
V. 組織や社会の一員として生きていく能力	10. 他者を理解し、他者のために役立つことができる （例：「お接待」の心／ホスピタリティ） 11. 集団・組織の一員として自覚と誇りをもって行動できる （例：責任感／連帯感／帰属意識／愛校心） 12. 地域の課題を、地球規模で考え、解決に向けて貢献できる （例：社会貢献／グローバルマインド）

1

1. 「愛大学生コンピテンシー」の策定について

愛媛大学は、2012（平成24）年7月の教育研究評議会において、「愛媛大学学生として期待される能力～愛大学生コンピテンシー～」（Ehime University Competencies Standards for Students: EUCS-S、以下「愛大学生コンピテンシー」と言う。）を定めました。一般的に「コンピテンシー」（competency）とは、「単なる知識や技能だけではなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な要求（課題）に対応することができる力」（OECD、大学評価・学位授与機構）と定義されていますが、愛媛大学では、「愛大学生コンピテンシー」を「**学生が卒業時に身に付けていることが期待される能力**」と定義しています。

「愛大学生コンピテンシー」は、「大学憲章」を踏まえながら、愛媛大学生が大学生として目指すべき**方向目標（目指すべき方向）**を示したものです。方向目標ですから、100パーセント達成することは必ずしも求められません。これが、卒業時に100パーセント達成していることを求められる到達目標であるディプロマ・ポリシー（diploma policy: DP＝学位授与方針）と異なるところです。このDPと「愛大学生コンピテンシー」の違いは、DPが主に正課教育の成果として達成されるものとして設定されているのに対して、「愛大学生コンピテンシー」は、正課教育だけでなく、準正課教育（卒業要件には含まれない、あるいは単位付与を行わないが、愛媛大学の教育戦略と教育的意図に基づいて教職員が関与・支援する教育活動や学生支援活動）及び正課外活動も含めた大学生生活全体の活動を包括して設定されていることによります。学生の活動は、卒業（学士号を取得）するために必要な正課の授業や研究活動だけで構成されているわけではありません。大学において学生一人ひとりが人間として成長する機会、正課外のサークル活動や、準正課のボランティア活動、留学、下級生への学修支援等々、正課以外にもたくさんあります。

愛媛大学は、このような学生の活動の場を大学として責任を持って確保し、大学生生活全体を通して学生一人ひとりが、知的に成長することはもとより、人間としてトータルに成長することを支援するという認識の下に、この「愛大学生コンピテンシー」を策定しました。従って、この「愛大学生コンピテンシー」は、学生諸君に対して卒業時に身に付けておいて欲しい能力を提示したのですが、同時に、そのような能力を育成することを、大学全体の教育目標として示したものでもあります。

2. 「愛大学生コンピテンシー」の構成要素について

「愛大学生コンピテンシー」は、「5つの能力」「12の具体的な力」によって構成されています。「愛大学生コンピテンシー」は、本学の各学部のDPや「共通教育の理念・教育方針」にある「学士基礎力」（参考資料「表2」参照）、そして中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」（平成20年12月、以下「学士課程答申」という。）の中の「学士力」（参考資料「表1」参照）や経済産業省の提唱する「社会人基礎力」（参考資料「表3」参照）の項目も参考にしながら策定されています。

以下、それぞれの能力について見ていきましょう。

I. 知識や技能を適切に運用する能力

1. 必要な情報を収集・整理できる
2. 個別の知識や技能を相互に関連づけながら習得できる
3. 習得した知識や技能を基に自分の考えを組み立て、適切に表現（記述・口述）できる

この能力は、いわゆる学修一般の基礎をなす能力と言えるでしょう。学問研究に留まらず、科学的手法で対象にアプローチする場合には、まず第一に、必要な情報を収集し、整理する力が必要です（I-1）。必要な文献・資料を読んだり、実験や調査、観察を行うことによって、知識の材料を収集し、整理します。次には（I-2）、その収集整理した情報を知識として体系化する、あるいは修得した技能を知識の体系と有機的に関連させ、必要に応じて自分で使いこなせるようにすることが必要です。例えば、科学的実験による測定・分析の技術の修得、調査や観察による情報の整理、あるいは、文献や資料を読みこなす力を身に付けること等々。しかしそれらも、単に断片的に行うだけでは本当の意味で知識・技能を獲得することにはなりません。学んだことを自分の中で相互に関連づけ、可能な限り体系化することによって初めて、それらを修得したと言えます。とりわけ、断片化された知識・情報が氾濫している情報化社会・ネット社会においては、知識を「相互に関連づける」ことは極めて重要です。この力は、学士課程答申の「学士力」の中の「1. 知識・理解」の部分が求めているものにほぼ該当します。

しかし、知識と技能が本当の意味で自分のものとなったと言えるのは、それを自分の中できちんと構造化・体系化し、適切に表現できるようになった時です。「分かっているけれども表現できない」のでは、本当の意味で分かったとは言えません。I-3は、一段高いレベルを要求しています。理解したことを、自分なりに論理的な筋道を立てて、体系化された知識として、しかも相手が理解しやすい適切な表現方法で表現する力を要求しています。ですから、このI-3の力は、「学士力」でいう「2. 汎用的技能」の中の（2）数量的スキル、（3）情報リテラシー及び（4）論理的思考力等の要素も含んでいます。

本学で開講されているすべての授業は、学生諸君がこのような能力を身に付け、さらに伸ばすことを目標として設定される必要があります。しかし、単なる知識伝達型の講義形式だけでは、このような能力を十分に育成することはできません。必要な知識や技能の枠組みを体系的に学ぶとともに、その都度その枠組みを使って情報を収集・整理し、体系的に関連づけ、効果的に表現する訓練をする必要があります。学生諸君は、このような能力を伸ばすことを意識して、主体的に学ぶ必要があります。このことは、この後の能力すべてにおいても当てはまります。

II. 論理的に思考し判断する能力

4. 広い視野と論理的思考に基づき分析・解釈できる
(例：クリティカル・シンキング／創造的思考)
5. 科学的根拠に基づき判断し、解決策を提示できる
(例：意思決定・判断力／課題探求・発見・解決力)

この能力も、学修の基礎的能力と言えます。学問研究だけでなく、社会生活においても、物事を論理的に思考し、判断できることは、高等教育を受けた者には必須の能力です。

まずは、II-4.「広い視野と論理的思考に基づき分析・解釈できる」力。様々な情報を収集・整理し(I-1)、それを相互に関連づけ(I-2)、広い視野に立って(つまり、可能な限りの情報を収集し、既に身に付けている知識・技能と関連づけながら)、論理的に考えて、対象を分析し、解釈します。従って、IIの能力は、Iの能力と一体化して働くものです。例示として挙げられている「クリティカル・シンキング(批判的思考)」は、既存の学問的知識の体系・枠組みも考慮しながら、なおかつ先入観を排除して、客観的根拠に基づいて対象を多面的に考察し、主体的に正しく(=論理的に)思考することです。この場合、他者の主張だけではなく、自分自身の主張をも批判的に考察します。この場合の「批判的」とは、単に既存の主張を論駁し、否定することを意味するものではありません。科学的・客観的根拠に基づいて、「知の境界線を定める」ことです。それが正しいと言える根拠を自分自身で提示できるようにならなければ、他人を納得させることはできません。そして、自分自身でその主張の根拠が提示できた時に、初めて「創造的思考」に到達したと言えます。この力は、主に「学士力」の「2. 汎用的技能」の中の「(4) 論理的思考力」に対応すると言えます。

このような分析・解釈に基づいて(=科学的根拠に基づき)、対象を判断し、自分自身が直面している状況から課題を正しく見つけ出し、課題の解決策を提示できる力が、II-5.「科学的根拠に基づき判断し、解決策を提示できる」です。言うまでもなく、このためにはIの能力も必要です。学問研究においてはもちろんのこと、社会生活においても、私たちは常に「意思決定」を求められ、「判断力」を発揮しなければなりません。実は、私たちは自覚しないでもいつも意思決定を繰り返しています。私たちの行為は、(自覚するにせよ、しないにせよ)自分自身の意思決定によって初めて生じます。その行為が正しいものであるかどうかは、その意思決定の根拠を正しく提示できるかどうかにかかっています。その根拠が科学的に(=客観的に)正当なものであると示すことができ初めて、他者からの承認が得られます。自立した個人として生きるためには、このような意思決定の根拠をきちんと認識し、それが客観的に正当なものであることを示すことが必要です。そのためには、自分の置かれている状況を正しく認識し、そこにある課題を見つけ出し、その課題を正しく解決する方策を考え出す力が必要です。この力は、主に「学士力」の「2. 汎用的技能」の中の「(5) 問題解決力」に対応し、そして「4. 統合的な学習経験と創造的思考力」へと発展するものであると言えます。「社会人基礎力」では、「考え抜く力(シンキング)」の特に「課題発見力」と「計画力」に対応します。

Iの能力と同様、IIの能力を伸ばすためには、実際にやってみることが大切です。経験を積み重ねて、「思考・判断」の力を鍛えていかないと、この能力を伸ばすことはできません。IとIIの能力を鍛える場は、「正課教育」の範囲だけには留まりません。本学が取り組んでいる「準正課教育」や「正課外活動」(例えばサークル活動)においても、このような能力を鍛えて伸ばしていくという意識が大切です。

Ⅲ. 多様な人とコミュニケーションする能力

6. 様々な状況に応じて適切な対話・討論ができる

(例：ダイアログ／ディスカッション／プレゼンテーション)

7. 目的達成のために多様な人と協働できる

(例：協調性／チームワーク／リーダーシップ)

この能力は、社会の中で活躍するためには必要不可欠な能力であるにもかかわらず、これまでの日本の大学教育ではこの能力の育成にあまり成果を上げてこなかったという批判があります。そのために、この能力は学士課程答申の「学士力」や経済産業省の「社会人基礎力」において特に強調されています。

この能力でいう「多様な人」で想定されているのは、様々な年齢・性別・職業・経歴・文化的背景等々の異なる人々ということです。人間は、「社会的動物」として、ある特定の時代のある特定の地域の間社会に生まれて成長し、存在しています。そのため必ず、ある文化的背景を背負った個人として存在しています。自分が持っている文化的背景と似通った背景を持った人とコミュニケーションすることは、比較的簡単です。しかし、激動期にある現代社会が直面している状況は、集団の均質性によってコミュニケーションが保証されるほど甘くありません。グローバル化が進展する現代社会においては、様々な国々の様々な文化的背景を持った人々が、チームを組んで課題に取り組むということが、日常化しています。その際に、均質な集団におけるコミュニケーション・スキルしか身に付けていない人は、チームに入り込むことができず、取り残されていきます。従って、現代社会において自立した個人として自己を実現するためには、グローバルな視点から見たコミュニケーション能力を身に付ける必要があります。

Ⅲ－6でいう「様々な状況に応じて適切な対話・討論ができる」力は、様々な文化的背景を持つ人々とのコミュニケーションを想定しています。しかし、ここでいう力は、「学士力」の「2. 汎用的技能」の中の「コミュニケーション・スキル」がいう正確な日本語運用能力とか外国語運用能力、あるいはビジネス・マナーといった、狭義のコミュニケーション・スキルだけを表しているものではありません。「適切な対話・討論ができる」ためには、そのような基礎的スキルも必要ですが、ⅠやⅡで示された知の運用能力がないと、「適切な」対話や討論はできないということも含意しています。「社会人基礎力」の「チームで働く力（チームワーク）」の中の「発信力：自分の意見をわかりやすく伝える力」や「傾聴力：相手の意見を丁寧に聴く力」、「柔軟性：意見の違いや立場の違いを理解する力」、さらには「状況把握力：自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力」といった能力要素も、このⅢ－6の力に含まれていると考えることができます。

Ⅲ－7. 「目的達成のために多様な人と協働できる」では、Ⅲ－6で示したコミュニケーションの力を基に、多様な人々とチームを組んで課題解決にあたる力を示しています。個々人が自己を実現するためには、多くの人と互いに協力し合って、協調し、チームを組み、適宜リーダーシップを発揮し合いながら目的を達成していくことが必要です。「学士力」の「3. 態度・志向性」の「(2) チームワーク、リーダーシップ」や、「社会人基礎力」の「前に踏み出す力（アクション）」の「働きかけ力：他人に働きかけ巻き込む力」及び「チームで働く力（チームワーク）」の各能力要素に該当する部分です。

このようなコミュニケーション能力を育成するためには、実際に多様なメンバーでチームを編成し、その中で様々なコミュニケーション活動を行い、チームワークを発揮して目的を達成する、という経験を数多く重ねることが必要です。この能力に関しても、実際に主体的に取り組まないと、それを鍛えて、伸ばすことはできないということです。

IV. 自立した個人として生きていく能力

8. 自らの個性や適性を活かして行動できる

(例：自己理解／自己決断／リフレクション)

9. 社会的関係の中で自分の行動を調整できる

(例：順応性／セルフマネジメント／規範遵守)

人間は、一人ひとりの存在が代替不可能な、唯一性・単独性を持つ存在者です。人間は、人間として存在している限り、一個人として生きているという事実から逃れることはできません。人間は、常に既に単独の自立した個人として生きるという状況に投げ込まれています。しかしその一方で、人間は「社会的存在」として、常に他者とともに存在し、彼らを含めた環境（周りの世界）の中に存在しています。そのために、差し当たって、個々人は自分の在り方を周りの世界から理解してしまいます。そして、多くの場合は、自覚することなく、周りの世界に合わせて自分自身の行動を決定してしまいます。いわゆる「周りに流されて」生きています。しかし、人間はその本性上、単独の自立した個人として存在するものであるために、ただひたすら周りに流され、周りに迎合して生きていくことなどできません。そうだとすれば、人間は「社会的存在」として周りの世界と常に関わりながら、単独の自立した個人として生きるしかありません。このような人間の本性を踏まえて、そこで特に必要と考えられる能力を示したのが、このIVの能力です。

IV－8. 「自らの個性や適性を活かして行動できる」では、周りの世界との関係を踏まえながら、自分で何ができるかを考える時に必要とされる力を提示しています。社会的存在としての自己実現のためには、自分自身を十分に理解し、自らが置かれている状況の中で自分の能力や適性、さらには自分の志や願望も踏まえて自ら決断し、その際に常にそのプロセスそのものを振り返り自己省察し、新たな状況に立ち向かう、という仕方で、「自らの個性や適性を活かして行動できる」力が必要です。「学士力」でいう「3. 態度・志向性」の「(5) 生涯学習力」と相通ずる力です。「社会人基礎力」では、「前に踏み出す力」の「主体性：物事に進んで取り組む力」や「考え抜く力（シンキング）」の「実行力：目的を設定し確実に行動する力」と関係していると考えられます。

しかしその際に人間は、他の人々との関係（社会的関係）の中で、その関係性そのものに働きかけながら行動し、自己を実現するしかありません。その際に必要とされる基本的な力を提示したのが、IV－9です。「社会的関係の中で自分の行動を調整できる」力がなければ、本当の意味での自己実現はできません。「順応性」「セルフマネジメント」「規範遵守」といった例示は、そのための具体的な要素を示したものです。「学士力」でいう「3. 態度・志向性」の「(1) 自己管理能力」や「(3) 倫理観」、**「社会人基礎力」**でいう「チームで働く力（チームワーク）」の中の「状況把握力：自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力」や「規律性：社会のルールや人との約束を守る力」「ストレスコントロール力：ストレスの発生源に対応する力」が該当します。

この能力に関しては、大学生活全体の中で培われるものと言うことができますが、本学では、共通教育、特に初年次科目の「こころと健康」や「スポーツ」などでその基礎知識を提供しています。それを基として、専門教育における研究室での活動や、準正課教育、さらには正課外のサークル活動等で意識的に伸ばしていくことが期待されます。

V. 組織や社会の一員として生きていく能力

10. 他者を理解し、他者のために役立つことができる

(例：「お接待」の心／ホスピタリティ)

11. 集団・組織の一員として自覚と誇りをもって行動できる

(例：責任感／連帯感／帰属意識／愛校心)

12. 地域の課題を、地球規模で考え、解決に向けて貢献できる

(例：社会貢献／グローバルマインド)

IVの能力とこのVの能力とは、密接に関連しています。「社会的存在」としての人間が、自立した個人として生きていくためには、社会との関わりを切り離すことはできません。自立した個人とは、ぽつんと宇宙空間に孤立している人ではなく、組織や社会の一員として生きている人間に他ならないのです。しかし、「組織や社会の一員として生きていく」といっても、それは決して全体主義的な態度を要求することではありません。人間は、その本質において自律的であり、自由な存在者です。その自由を発揮する足場として組織・社会を必要とします。逆説的ですが、組織や社会の一員として存在しなければ、人間は自由で自立した個人ではありえないのです。

「組織や社会の一員として生きていく」ためには、まずはそのメンバーとして共に生きる人たちを理解し、互いに助け合うことが必要です（V-10）。特に、本学がある愛媛県は、四国八十八箇所巡礼の中の「菩提の道場」として、お遍路さんたちに「お接待」を行う伝統を持つ地です。「組織や社会の一員として生きていく」ということは、共に生きる人たちと共に喜び、共に悲しみ、苦しむことであり、またその人たちのために自分ができることをさせていただくことです。『「お接待」の心』とは、そのような心です。「ホスピタリティ」という言葉も、同様な意味で理解できます。

言うまでもなく、組織や社会は、その構成メンバー一人ひとりが役割分担（分業）をしながらそれぞれの役割を果たすことによって、初めて機能します。確かに、社会的存在として人間は、社会（組織）なしには存在できませんが、社会（組織）も、それを構成する個人なしには存在できないのです。V-11は、このような社会的存在として人間が、人間として存在するために不可欠である社会性を発揮するために必要な力を示したものです。これまで述べてきたIからIVまでの能力を踏まえた上で、自分自身が所属している社会・組織をより良いものにしていくという気概を持つこと、それがここで求められています。

最後のV-12。「地域の課題を、地球規模で考え、解決に向けて貢献できる」は、社会的存在として人間が、現代社会において果たすべき役割を改めて提示したものです。社会は、現実には常に地域社会として一人ひとりを取り巻いています。「地域にあって輝く大学」をモットーとする愛媛大学の学生諸君や卒業生には、自分が所属している社会や組織をより良いものにするという志を持って「社会貢献」できる人間であってほしいと考えています。

このVの能力も、本学の教育活動全体を通して育成されるべきものです。この能力を鍛えるためには、実際の組織・集団の中での経験を多く積むことが必要です。そのためには、正課教育も大きく関わるでしょうが、準正課教育や正課外活動の関与の度合いが大きいと考えられます。この能力に関しては特に、教える側も学ぶ側も、この能力を意識的に鍛え伸ばすという認識を持つことが大切です。

3. おわりに

以上、「愛大学生コンピテンシー」の5つの能力と12の具体的な力（能力要素）について、個別に見てきました。しかし、既に述べたように、これらの能力や力（個々の能力要素）は、単純に個別的に育成・強化されたり、発揮されたりするものではありません。むしろ個人の行動特性として、トータルに発揮されるべきものです。とは言っても、人によってそれぞれの能力要素の重要度や到達度に違いがあるはずです。このように「5つの能力」「12の具体的な力」として分類したのは、学生諸君に自己分析・自己省察のツールとして利用してもらうためです。この「愛大学生コンピテンシー」の枠組みを参考にして、自分自身の能力の現状を正確に把握し、強いところはより鍛えて伸ばしていき、弱いところは補い強化するという意識的に取り組んでもらいたいと思います。

〈参考資料〉

「表1」各専攻分野を通じて培う学士力 ～学士課程共通の学習成果に関する参考指針～

1. 知識・理解

専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解するとともに、その知識体系の意味と自己の存在を歴史・社会・自然と関連付けて理解する。

- (1) 多文化・異文化に関する知識の理解
- (2) 人類の文化、社会と自然に関する知識の理解

2. 汎用的技能

知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能

- (1) コミュニケーション・スキル
日本語と特定の外国語を用いて、読み、書き、聞き、話すことができる。
- (2) 数量的スキル
自然や社会的事象について、シンボルを活用して分析し、理解し、表現することができる
- (3) 情報リテラシー
情報通信技術（ICT）を用いて、多様な情報を収集・分析して適正に判断し、モラルに則って効果的に活用することができる。
- (4) 論理的思考力
情報や知識を複眼的、論理的に分析し、表現できる。
- (5) 問題解決力
問題を発見し、解決に必要な情報を収集・分析・整理し、その問題を確実に解決できる。

3. 態度・志向性

- (1) 自己管理能力
自らを律して行動できる。
- (2) チームワーク、リーダーシップ
他者と協調・協働して行動できる。また、他者に方向性を示し、目標の実現のために動員できる。
- (3) 倫理観
自己の良心と社会の規範やルールに従って行動できる。
- (4) 市民としての社会的責任
社会の一員としての意識を持ち、義務と権利を適正に行使しつつ、社会の発展のために積極的に関与できる。
- (5) 生涯学習力
卒業後も自律・自立して学習できる。

4. 統合的な学習経験と創造的思考力

これまでに獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決する能力

(http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf 参照)

「表2」愛媛大学「学士基礎力」

1. 自らの個性や適性に基づき学び続ける姿勢（基本姿勢） 自分に向き合う／前に踏み出す／自ら必要な知識や技術を学ぶ／自己管理／健康管理
2. 多様な人と協働するための表現力やコミュニケーション力（基本的コミュニケーション力） 聴く力／表現する力／チームで働く力／リーダーシップ
3. 学習活動や社会生活に必要な技能（基本技能） 外国語の基礎的運用能力／数量的スキル／情報リテラシー
4. 多角的な視点を培うのに必要な幅広い基礎知識（基礎知識） 諸科学の基礎的知識／異文化理解／人文・社会・自然分野についての包括的理解
5. 問題の発見・解決に取り組むための思考力（基本的思考力） 課題を発見する力／論理的思考力／科学的思考力／知識・情報の運用力／計画力

「表3」社会人基礎力〈3つの能力／12の能力要素〉

前に踏み出す力（アクション） ～一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力～ 主体性：物事に進んで取り組む力 働きかけ力：他人に働きかけ巻き込む力 実行力：目的を設定し確実に行動する力
考え抜く力（シンキング） ～疑問を持ち、考え抜く力～ 課題発見力：現状を分析し目的や課題を明らかにする力 計画力：課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力 創造力：新しい価値を生み出す力
チームで働く力（チームワーク） ～多様な人々とともに、目標に向けて協力する力～ 発信力：自分の意見をわかりやすく伝える力 傾聴力：相手の意見を丁寧に聴く力 柔軟性：意見の違いや立場の違いを理解する力 状況把握力：自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力 規律性：社会のルールや人との約束を守る力 ストレスコントロール力：ストレスの発生源に対応する力

(<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/about.htm> 参照)